自尊感情を高める「ことば」を大切にした教育活動の工夫と実践

東京都港区立三田中学校　佐藤　文

1　はじめに

都市部に集中する教育施策であろうが、学校選択希望制が公立中学校では拡大している。このことによる成果は一定程度あるだろう。しかし、対人関係に起因する多くの課題も顕在化している。

本校の新入生の出身小学校を分析すると、この5年で7校程度であったものが20校近い小学校から新入生を迎えている。学級で班作りをしたら、6人班全員が違う小学校であることも珍しくなくなった。今までなら「言わなくても分かってくれた。」という思いが、対人関係をこわばらせ、入学してわずか2週間程度で「登校しぶり」が起きてくる。理由を丁寧に聴き取ってみると、「ことば」による行き違いやトラブルが殆どである。殆ど、の中の数パーセントは、「ことば」以前に「避けられている」だとか「じっと見られているのが怖い」といった理由もある。今回は、「ことば」を中心に考えていくので、これらのことは割愛していく。対人関係を円滑にするために必要な能力は、コミュニケーション能力や人間関係育成能力等である。この能力を国語科を中心に、全教育活動で展開する、その土台は「自尊感情を高め、自己有用感を高めること」が前提である。以下に取組例を示す。

2　ガイダンス機能の充実

「何のために」「何を」「いつまでに」「どの程度」学ぶかを明確にするために、ガイダンス機能の充実を図ることである。本校では、「中1ギャップ」対策として、「中学校ってどんなところ」説明会の資料を冊子にして実施している。また、学習の評価項目を明確にし学びの動機付けとして「評価説明会」を4月に実施している。これには、家庭学習のやり方、予習・復習の仕方など、学習シラバス的な役割も果たしている。また、少人数指導実施の教科（数学・理科・英語）は実施前に必ずガイダンスを実施し、少人数で学ぶ意義を浸透させるようにしている。このように、「ことば」でその必要性や意義を明確に示すことが、言語活動をカリキュラムマネジメントに位置付ける第一歩であろう。

3　国語教室からの発信

国語教室はまさに、コミュニケーション能力や人間関係能力の育成の場である。どんな授業形態をとることになっても「他者を受け入れ、自分の考えを伝え、そのことによって相互信頼を深め合う」前提がなければ成立しないからだ。それでは、教師はどんな点に気を付けて、生徒の自己有用感を育て自尊感情を高める指導をしたらよいのかについて、実践事例を述べてみたい。ここでは、1学年対象の事例を挙げていく。（9月号掲載なので2学期からの想定とする。）

①　2学期全体の学習計画を生徒に示す。こ

の学期で、どんな力を付けていくのか、学習の大目標を示す。教科書の単元に沿って月ごと中期目標を示す。単元テストや漢字テストなど、学習の区切り目になるような「学習の振り返り」にはフォントを大きくする、飾りをつけるなど、工夫して表記する。（＝ガイダンス機能の活用）

※定期考査、単元テストや漢字テスト等は生徒自身の到達度の指標であり、定着の「ものさし」であることは1学期の国語教室の最初のガイダンスで明確に生徒に伝える。それは評価評定の基準とはなるが、そもそも「評価」とは、それを受けた「改善」に力点が置かれるものであり、更なるバージョンアップのためのものだ、ということを理解させる。「国語が嫌い。」という生徒はどこかで「できない、分からない、そもそも、何をしたらいいか分からない。」といった自己不全感や「もっと頑張ればできるでしょ」といった他者から「自分の頑張りを評価されていない。」不満感を抱いている生徒が多い。「苦手」科目の、どの教科についても共通していることではないだろうか。

②　班学習のグルーピングは、生活班で構成していいものと、キーパーソンを決めて意図的にグルーピングした方が効果が上がる場合がある。意図的なグルーピングの時はその理由を生徒がなるほど、と思うように説明する。例えば、「○○さんは、みんなの意見を出させる仕方が上手いからね。」とか「○○さんは、動詞の活用の仕方のコツを伝えるのが上手いからね。」というように、「国語が得意」ではなく「仕方が上手い」生徒をキーパーソンに据えることが前提である。ここに、生徒自身は「自分にはそんな一面もあったのか。」と気付くこともあるだろうし、何より「○○さんのやり方のうまさ」について他者認知が広がるところである。「先生、ほんとに僕（私）でいいの？」と、私自身何度も聞かれた。「あなたのやり方がみんなを伸ばしてくれるからいいのよ。」と、その度に私も必ず答えた。

③　評価については、毎時必ずポートフォリオ評価していく。自己評価や特にグループ学習では、他者評価を記入させる。私自身は一斉授業の時には「先生への通信簿」といった形で記入させた。「より良い授業をあなた達と作るために、先生へのメッセージ（注文）を書いて下さい。」というように。これは、国語教室の共同制作者としての生徒への投げかけである。

4　おわりに

自尊感情は、「共に生きる・共に創る・共に伸びる」場、つまり、自他を尊重する畑があって、初めて、芽が出て、双葉が開いて、茎が伸びていく。子どものしなやかな感性に絶対の信頼感を置きながらも、ややもすると折れやすい感性の「茎」に私達教師が、必要に応じて支柱を添えていくことだ。言語活動の重要性は今に始まったことではないが、極めて変化の激しい社会と情報の中で生きている今日の子ども達に、「ことば」によって人の気持ちの有り様が有意に働くことを、リアルに体験させることが有効に働くことを、地道に飽くことなく、伝え、学ばせていきたい。

さとう　あや　昭和58年、入都。文京区立茗台中学校教諭に着任し、平成17年度より港区立三田中学校　副校長、現在に至る。慶應義塾大学教職課程センター伊藤美奈子教授と共に「こどもの自尊感情を高める」ことについて、現在研究中。日本教育行政学会会員。